

Title	京都大学吉田南構内 遺跡発掘調査現地説明会資料
Author(s)	京都大学文化財総合研究センター
Citation	(2014)
Issue Date	2014-10-22
URL	http://hdl.handle.net/2433/244184
Right	
Type	Others
Textversion	publisher

京都大学吉田南構内 遺跡発掘調査現地説明会資料

平成26年10月22日（水）12:30～

遺 跡 名：吉田(よしだ)二本松町(にほんまつちょう)遺跡

所 在 地：京都市左京区吉田二本松町（京都大学吉田南構内 吉田グランド南側）

調査機関：京都大学文化財総合研究センター（担当：伊藤淳史・笹川尚紀）

調査期間：平成26年6月30日～12月中旬（予定）

<はじめに>

大学施設の建設に先立ち、文化財保護法の定めに従い、周知の遺跡である予定地約1500㎡の発掘調査を実施中です（図1）。今回、弥生時代前期後葉（約2300年～2400年前ごろ）の水田の跡、流路、当時の地形などが、非常に良好な状態で検出されました。成果の重要性を考慮し、ひろく現地の状況を公開するものです。

<成果の概略>

- ・発掘は、地層の堆積に従って、上部の江戸時代から順にさかのぼる形で進めております（図2参照）。開始以後のこれまでの成果については、文化財総合研究センターホームページ <http://www.kyoto-u.ac.jp/maibun/>にて紹介しておりますので、ご参照ください。
- ・弥生時代前期の水田は、小区画水田と呼ばれる、畔で平均10㎡程度の小さな短冊状に区画したものが、調査区東南部一帯で確認されました（図3参照）。この時期には典型的な形状です。1994年に南側の人間環境学研究科棟建設に先立つ調査でみつかっており、それと連続するものです（図3）。縄文晩期～弥生時代前期の遺物を含んだ地層（第6層：灰色粘質土）の上面に築かれており、弥生前期末のごく一時期に生じた土石流堆積層（第5層：黄色砂）に覆われていることから、水田の時期は前期後葉ごろ、と認定できます。
- ・今回は、水田北縁部の状況と、水田につながる流路も確認できました。これにより、過去の成果と合わせて水田範囲の北・西・南側の範囲が確定されることになりました。
- ・水田の畦畔は、幅20cm 高さ10cm 程度の堅固な断面半円形の盛り土で築いており、一部に水口となる切れ目を設けています。田面は凹凸が著しい状態で、春先などの耕起状態をとどめているのではないかと想定しています（図3・水田域A）。
- ・北側からの流路2条は、堤をともなっている箇所があります。水田の北端は、東西方向のしっかりとした溝と畔とで区画され、流路からの水をオーバーフローさせながら南の水田域へ配したと想定されます。この北側にも痕跡的な畦畔が確認される空間が100㎡ほどあり（図3・水田域B）、開墾された本来の範囲を示すものと推測しています。
- ・周辺は、緩やかな起伏の地形（比高差30cm程度）がひろがっています。住居や墓地は見つかっていません。遺物は、弥生前期ごろの土器片約100点あまりが出土しています。

<成果の意義>

弥生前期の水田は、西日本でほかにいくつか知られておりますが、今回は、ごく一時期と想定される洪水砂層に覆われ、田面や周辺地形が当時のままとみられるきわめて良好な状態をとどめている点、資料価値の高いものといえます。日本列島で稲作が本格的に始められたといえる弥生前期の、水田を作る技術や知識、当時の人々の地形環境への対応の仕方などを、具体的に知ることのできる貴重な事例と評価されます。

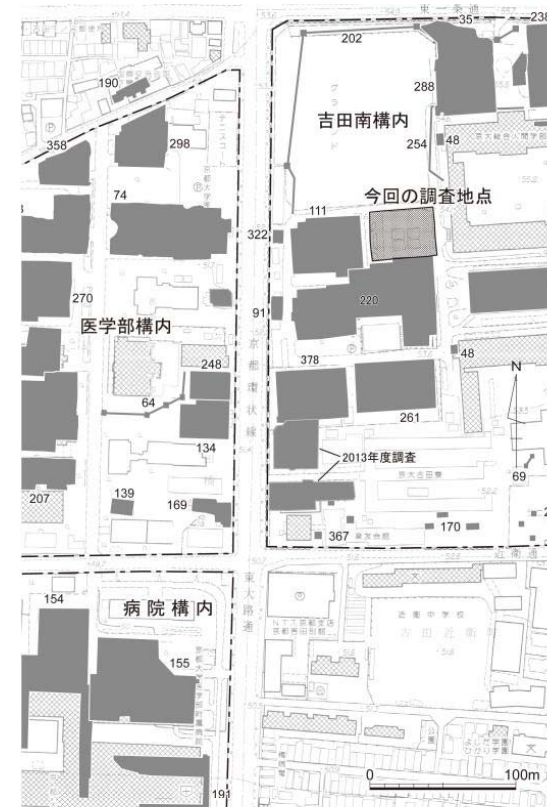


図1 今回調査地点の位置（上が北・縮尺約1/5000）



参考：1994年度調査時の水田遺構（北東から）



参考：今回発見の水田遺構（東から）

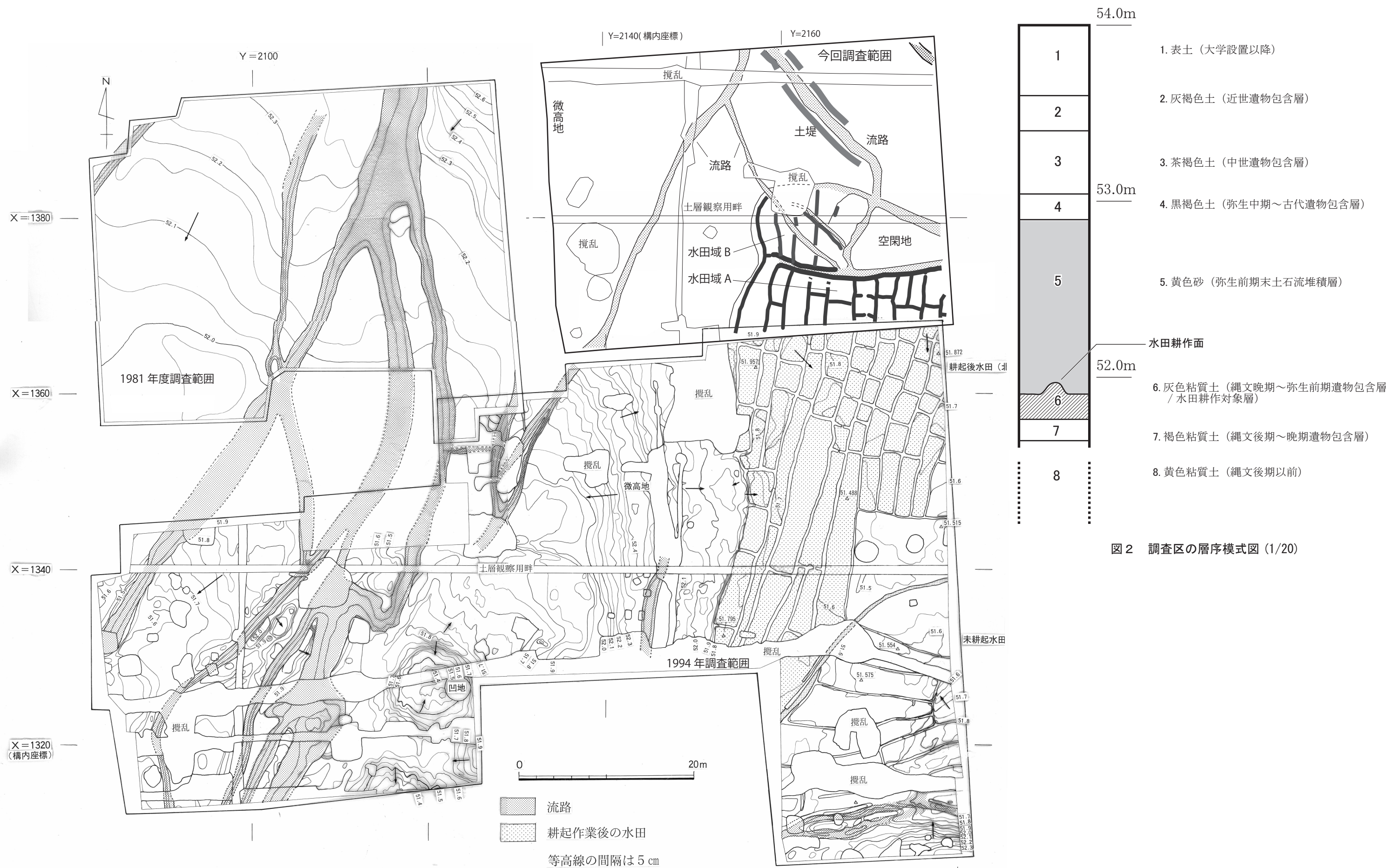


図 2 調査区の層序模式図 (1/20)

図 3 弥生前期の遺構配置概略図 (1/400)